

河童による地域振興：兵庫県福崎町を事例に

ITO, Tatsuya / 伊藤, 達也

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

86

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2023-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026714>

河童による地域振興

—— 兵庫県福崎町を事例に ——

伊 藤 達 也

1. はじめに

(1) 問題の所在

本稿は河童による地域振興の可能性を明らかにすることを目的とする。筆者はこれまで一貫して水辺環境の保全を中心とする水と人間社会の関係を明らかにするための研究を行ってきた。特に水辺環境を根本から破壊するダム・河口堰計画の問題点を指摘し代替案を提示することによって、良好な水辺環境の保全策を模索してきた（伊藤 2005, 2006, 2008）。このタイプの研究は現在に至るまで継続しており、対象地域も木曽川水系（伊藤 2019a）、利根川水系（伊藤 2018）、さらには、現在、わが国の水資源問題で最も注目が集まる長崎県の石木ダム計画（伊藤 2019b）へと広がり、中央・地方政府によって計画中止が宣言されながら、2020年7月の球磨川水害をきっかけにダム計画が復活した川辺川ダム問題についても、水没予定地の五木村の地域振興策を中心に研究を行っている（伊藤 2021a, b, c）。海外では韓国の4大河川再生事業（伊藤 2017）、同じく韓国のラムサール条約登録湿地の保全（浅野ほか 2013, 浅野ほか 2015）、中国・太湖の富栄養化問題（浅野ほか 2011）などを対象にした研究を行ってきた。

しかしながら、筆者が主対象としてきた木曽川水系では、計画の修正や水辺環境保全の理解は進んだものの、水辺環境を保全する試みの重要性が流域住民に広く一般化したとはとても言えない。筆者は、これまでの研究が水と人間社会のより適切な関係を構築するための手段として、特に人々の水辺環境への関心を醸成する点において、必ずしも十分に機能しておらず、多くの人々が関心を持ちやすい別のアプローチが必要であると考えに至った。

水辺環境の良好さを追求する運動や研究は、これまでもたくさん存在するが、注目されるのは、人間社会と自然との間に媒介として鮭（吉崎 1982, 須藤 1985, 横川 2005）、鮎（田辺 2006）、カブトガニ（大塚ほか編 2020）、ホタル（水と文化研究会編 2000, 遊磨・生田 2000）等の水生生物を置き、生物の保全を追求していくことで水辺環境への人々の関心を高める研究である（図1）。そうした水辺環境保全をさらに地域振興と関連させて議論していくことによって、水辺環境保全研究は経済地理学の側面からも適切なアプローチが可能となり、地域振興と環境保全の関係を、対立ではなく両立しうる関係としてとらえることができるのではないだろうか（伊藤 2020）。

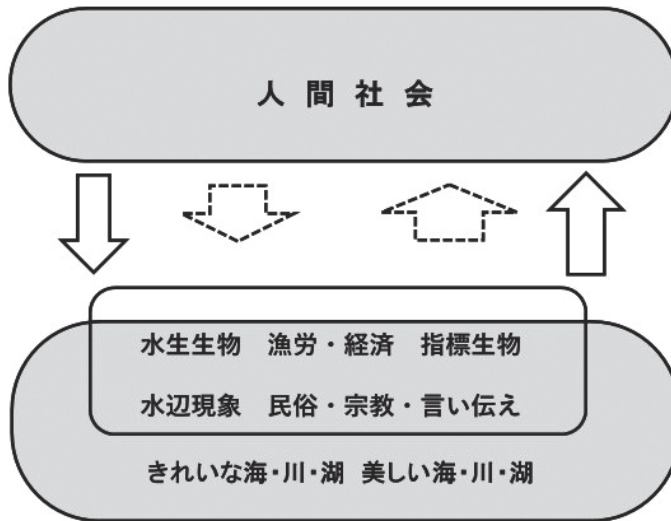


図1 人と水辺環境を結ぶ多様な手段

出典) 筆者作成

筆者は本研究テーマを進めるにあたって、既に河童による水辺環境保全運動と地域振興効果について、福岡県久留米市田主丸町でアンケート調査を実施した(伊藤2019c)。本稿の報告はそれに続くものであり、2022年3月5日(土)～7日(月)、4月3日(日)に兵庫県福崎町でアンケート調査及び聞き取り調査を実施した。ただ、今回は河童による地域振興効果に焦点をあてたため、水辺環境保全との関わりの追求は調査目的として薄くなっている。

(2) 地域振興を目的とする問いかけ

既述したように、開発に伴う環境破壊を防ぐための手段として有効なのは、人間社会が生物種の保全や共存を内に取り込んだ地域振興策を生み出していくことであると筆者は考える。そしてそれは、近年、急速に理解の深まっている生態系サービス概念を取り込むことと関係している。生態系サービスとは、「生態系から人々が得るめぐみであり、食糧・水・木材・繊維のような供給サービスや、気候・洪水・疾病・廃棄物・水質に影響する調整サービス、レクリエーションや審美的・精神的な恩恵を与える文化的サービス、そして栄養循環・土壌形成・光合成のような基盤サービスが含まれる」(Millennium Ecosystem Assessment 編／横浜国立大学 21 世紀 COE 翻訳委員会責任翻訳 2007)。

これまで環境問題は人間社会の活動による生態系への負の影響として理解されてきた。その際、生態系そのものは攪乱されることによって始めてその価値が見出される存在であり、攪乱される以前の生態系の価値が考慮されることはほとんどなかった。それに対して生態系サービスは、現存の生態系をより積極的に人間社会にとって価値あるものとして評価することにより、環境を資源と同義に捉えていくことである。本稿はまさに資源として河童を捉えていくことの可能性を探ることにより、河童を通じて

生態系サービスの顕在化を目指すものである。理想論ではあるが、環境保全を目的とすることがそのまま地域振興に結び付けば、環境保全に全く関心のない者も、地域振興を目的とすることによって、結果的に環境保全に寄与することになる。

(3) なぜ河童なのか

ではなぜ河童なのか。人間社会と関わりの深い多くの水生生物がいる中で、河童に焦点をあてて水辺環境保全、さらには地域振興に結び付けた研究を行うのには、以下の4つの理由がある。

第1点は、河童は既に水辺環境保全の中心的な生物として広く認知されていることである。水辺の接近に注意を促す看板では、河童をモチーフにしたものが多いことは理解されるであろう。第2点は、地域性を強く帯びる他の水生生物と異なり、河童は、北は北海道から南は沖縄まで広く全国的に棲息している。従って、今後、全国レベルの比較研究の可能性が広がっている。第3点は、岩手県遠野市や兵庫県福崎町等、既にいくつかの地域で河童は地域振興手段として用いられている。河童を媒介にして水辺環境保全と地域振興をつなぐ試みは現実の方が先に進んでいるのである。そして第4点として、河童は他の水生生物と異なり、その実在が疑われている存在である。そしてそのことがまさに観光を中心とした地域振興策の中で重要性が語られる「ものがたり」の作成に大変有利に作用している。こうした点から、水辺環境保全、さらには地域振興策において河童に焦点を当てるのは、大変適切な手続きなのである。

河童の地域振興効果については、大野による河童村に関する活動報告（大野 2000）と、特定非営利活動法人風土工学デザイン研究所（2012 年度）が注目される。前者は河童そのものへの関心だけでなく、河童と遊ぶ、河童で遊ぶ指向性が、現在、全国で行われている地域振興策、特にゆるキャラによる地域振興策と似た性格を有している。一方、後者は風土工学の視点から河童を地域振興の一手段としてとらえ、その事例報告を行っている。対象地域は福岡県久留米市田主丸町、大分県国東市、埼玉県志木市であり、河童を地域振興との関係で把握しようとする視点は筆者の立場とよく似ている。また、ミニ独立国の視点から八代市の河童王国を分析した白石（2020）も、河童と地域振興の関係について語っている点で注目される。筆者はこれらの先行研究を参考にしつつ、兵庫県福崎町で実施されている河童による地域振興策を、主に地域住民の意識の点から明らかにしていく。

2. 福崎町の河童振興策

(1) 福崎町の概要

兵庫県福崎町は柳田國男の出身地である。町の中央部を市川が流れ、姫路市の北に位置する内陸の町である（図2）。面積 45.79km² で、人口は2022 年 8 月 31 日現在 18,753 人、世帯数は 7,852 世帯である（福崎町 2022b）。中国自動車道と播但連絡道路が福崎 IC で交差しており、広域交通の要衝地である（国土交通省近畿運輸局神戸運輸監視部兵庫陸運部 2018）。人口は 1990 年代からほぼ横ばいに推移している（図3）。通勤・通学とも流入数が流出数を上回っている。町内東西の工業団地が、経済活性化や雇用機会創

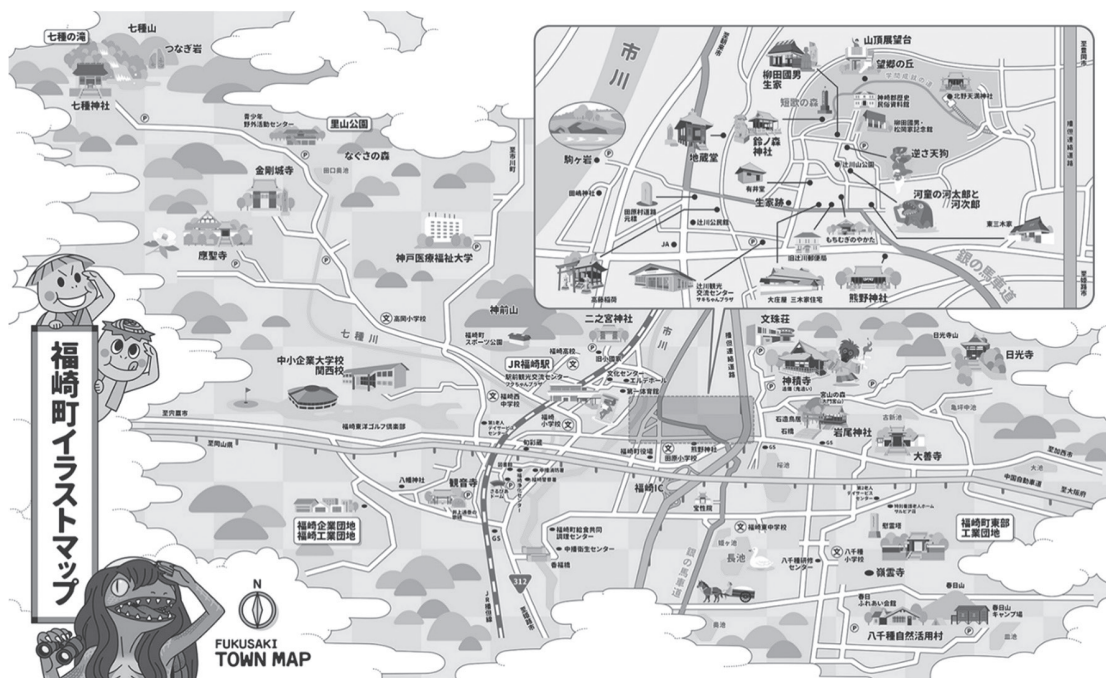


図2 福崎町イラストマップ

出典) 福崎町観光協会 (2022a)

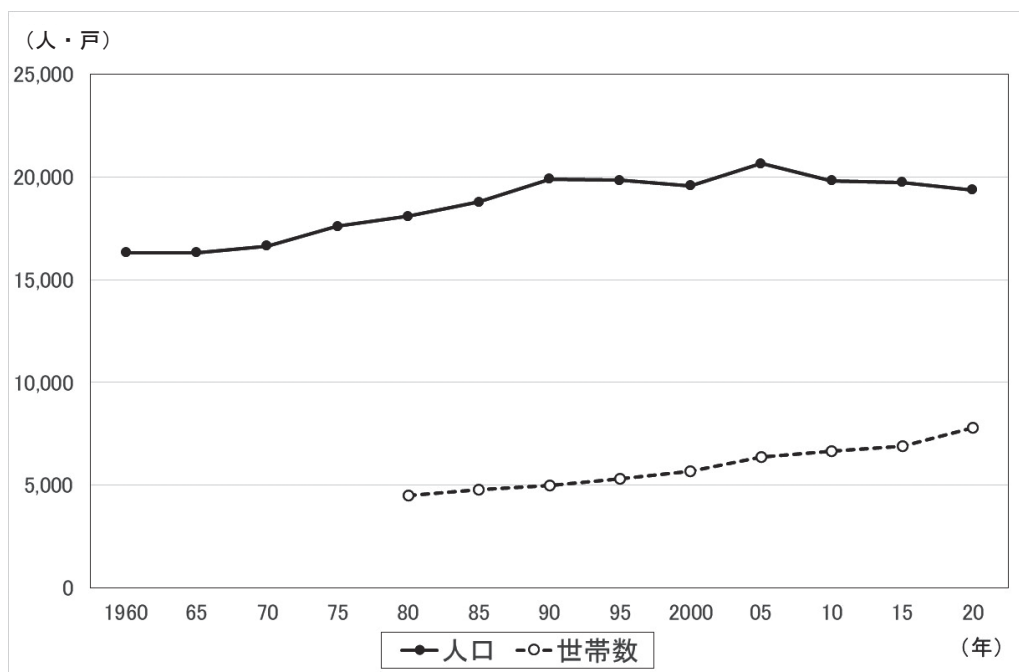


図3 福崎町の人口・世帯数推移

出典) 福崎町 (2021)

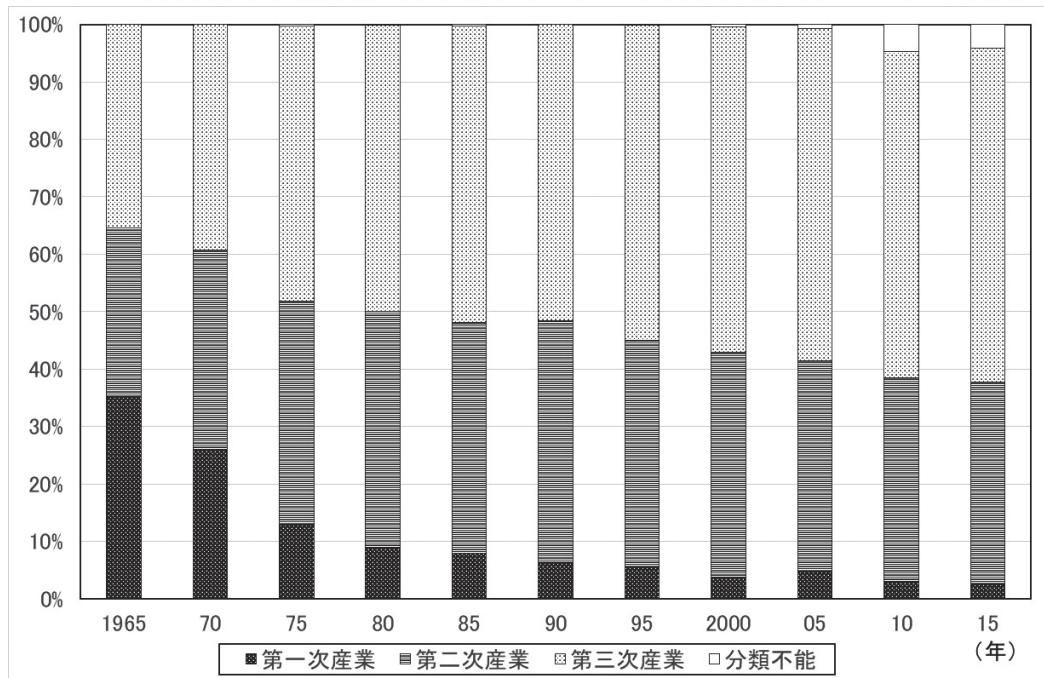


図4 産業別就業人口の割合の変化

出典) 福崎町 (2021)

出などで大きな役割を果たしている。就業人口は1990年8,946人、2015年9,434人と増加、産業別就業人口の割合は1990年から2015年にかけて、第一次産業6.1%→2.6%、第二次産業42.1%→35.1%、第三次産業51.6%→58.2%と推移しており、第三次産業の割合が高いものの、第二次産業も高水準を維持している(図4)。

(2) 河童による地域振興の試み

現在、全国的に河童を使った地域振興策を実施している自治体として、岩手県遠野市、茨城県牛久市、千葉県我孫子市、埼玉県志木市、兵庫県福崎町、福岡県久留米市、福岡県久留米市田主丸町などを挙げることができる。例えば、遠野市には様々な妖怪が棲息するが、市内の土産物屋の中心グッズは河童である(図5)。久留米市田主丸町では、地域の特産品として和菓子「河童のへそ」(図6)、焼酎「九千坊」などが販売されている。牛久市、志木市では河童にまつわる施設・モニュメントの整備(図7、図8)が進み、我孫子市では毎年夏にカップまつりが開催され、多くの市民が河童音頭を踊っている。

こうした全国的な動きに対して、福崎町の河童による地域振興策も決して引けを取らない、いや、最も活発かもしれない。福崎町に由来する河童は柳田國男と深い関係があり、市川の駒ヶ岩の河童のガタロウ(河太郎)がモチーフになっている。ガタロウは河童兄弟の兄で、柳田國男の生家が保存されている辻川山公園の池のほとりでお皿が乾き動けなくなり、固まっている。一方、河童兄弟の弟のガジロウ(河



図5 遠野市の土産物屋の風景（旅の蔵遠野）

出典）筆者撮影 2021年10月30日



図6 河童のへそ

出典）筆者撮影 2022年3月22日



図7 牛久の河童

出典）筆者撮影 2020年6月21日



図8 カッピー（志木市）

出典）筆者撮影 2020年1月5日



図9 池から出るガジロウ

出典) 筆者撮影 2018年3月11日



図10 福島駅前のフクちゃんサキちゃん

出典) 筆者撮影 2018年3月11日



図11 福崎駅前のガジロウ

出典) 筆者撮影 2022年4月3日

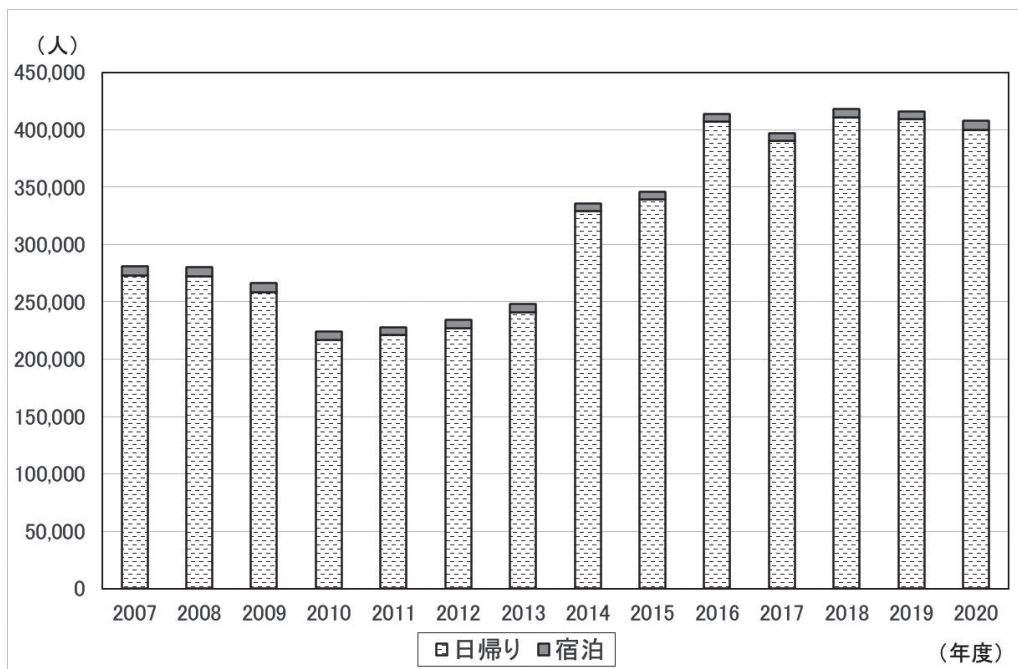


図12 福崎町における観光客数の推移

出典) 福崎町 (2021)

次郎) は今回の企画に際して考案された創作キャラで、これまで行ってきた悪さを柳田國男に謝るために、柳田國男の生家に向けて 30 分おきに池の中から出現する (9 時から 17 時、現在は 15 分おきに現れる)。2014 年 2 月に設置された河童兄弟は、近年はやりのゆるキャラ的なかわいさはみじんもなく、大変怖い姿で、池から現れると、小さな子どもは泣き出すとうわさになった (図 9) (福崎町 2014)。実際、2018 年 3 月に筆者が見学した時も、隣で大人に抱かれた子供がガジロウの姿を見るなり、泣き出した。

実は福崎町には 2009 年福崎町キャラクター・フクちゃんサキちゃんという河童キャラがデビューし、町内で活躍していたが、ガジロウが池から現れるようになると、主役キャラクターの座を奪われ、福崎駅前にあったフクちゃんサキちゃんも撤去されてしまった¹⁾ (図 10)。代わりに 2019 年、辻川山公園の池から福崎駅まで水路 (ひみつのガジロウ地下トンネル) が掘削され (空想と思われる) (福崎町観光協会 2022d)、福崎駅前にガジロウが現れる水槽「ガジロウチューブ」が設置された (図 11)。ガジロウは池から現れて以来、マスコミで頻繁に取り上げられるようになり、観光バスが列をなすほどの人気となった。現在はコロナの影響もあり、観光バスが連なることはなくなったものの、観光客数の推移を見る限り、ブームは続いているようである (図 12)。

(3) 全国妖怪造形コンテストの実施と妖怪ベンチの設置

福崎町は怖い河童路線を成功と捉え、積極的に路線強化を図っていく。第一弾として 2014 年から 2018 年までの 5 年間、全国妖怪造形コンテストを開催した。これは、妖怪と造形を軸とした町おこしイベントで、柳田國男の『妖怪談義』に出てくる妖怪をフィギュア化したものを募集したものである。国内外



図 13 妖怪ベンチ (ガジロウ)



図 14 妖怪ベンチ（座敷童子）
出典）筆者撮影 2022 年 3 月 6 日



図 15 妖怪ベンチ（子啼爺）
出典）筆者撮影 2022 年 3 月 6 日



図 16 妖怪ベンチ（海坊主）
出典）筆者撮影 2022 年 3 月 6 日

から多くの作品が寄せられ、各回の最優秀作品をブロンズ像にしたものが、辻川山公園内に展示された。2014 年度のテーマは天狗、2015 年度は小豆洗い、山の神、雪女、2016 年度は鶴（ぬえ）、座敷童子、マヨイガ、2017 年度は砂かけ婆、牛鬼、猫また、そして最終年の 2018 年度は『妖怪談義』に載っている妖怪すべてを対象とした。

また、2016 年にはガタロウとガジロウの物語を絵本として出版、同じく 2016 年度からは、町内に妖怪ベンチの設置を開始した（図 13）。妖怪ベンチは 2022 年 12 月までに 20 基設置され（図 14、図 15、図 16）、妖怪ベンチを巡る案内地図も作成された（図 17）。現在もベンチの設置は続いている。2018 年には第 45 回福崎夏祭りのステージにガジロウが現れ、ステージで尻子玉撒きを披露し、会場を盛り上げた（福崎町 2018）。

そして 2019 年 10 月には観光の基地となる福崎町駅前観光交流センターと辻川山観光交流センターが完成し、福崎町の観光構想はいよいよ具体的に見える形になってきた（福崎町 2019）。

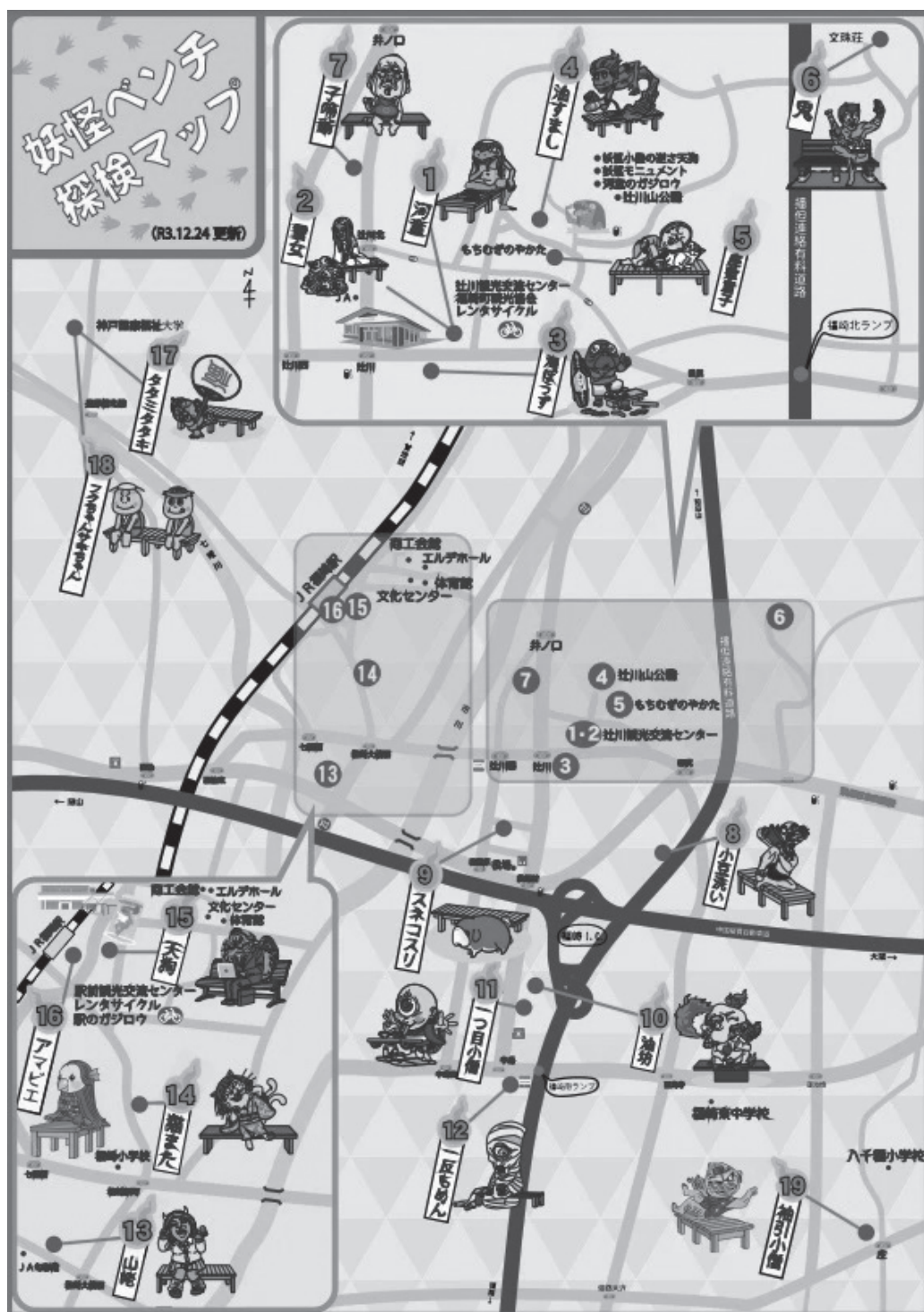


図 17 妖怪ベンチ探検マップ

出典) 福岡町観光協会 (2021)

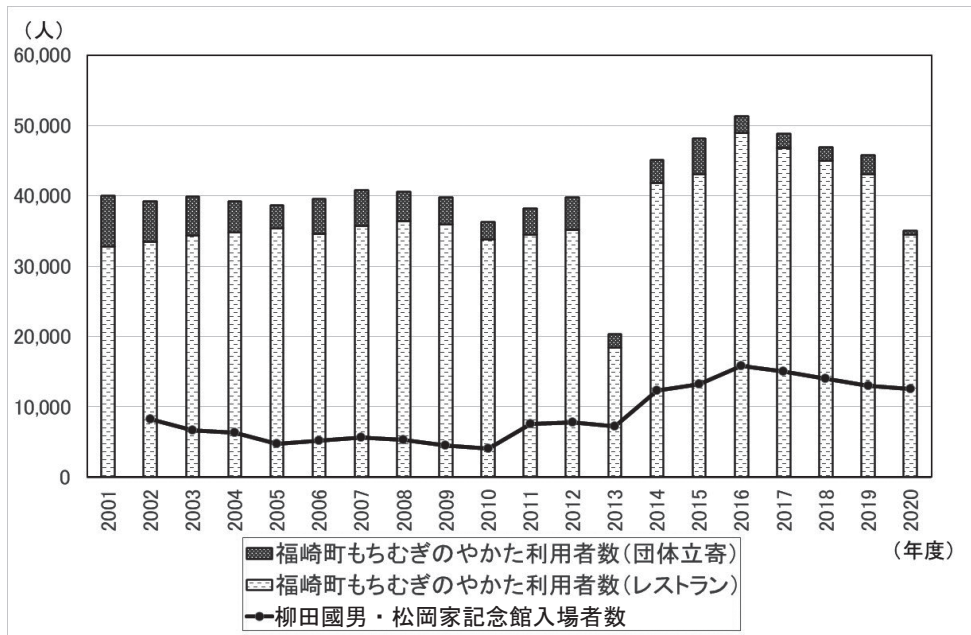


図 19 福崎町の主要観光施設における観光客数の推移

注) 福崎町もちむぎのやかたの利用者数は、2001～2012年度は9月1日～8月31日、2013年度は9月1日～3月31日、その後は4月1日～3月31日。

出典) 福崎町 (2021)



図 20 福崎町の観光ガイド

出典) 福崎町観光協会 (2022c)

くだけであったが、今は町の至るところに妖怪ベンチが設置されており、移動にも楽しみが伴いつつある。2か所の観光交流センターにはレンタサイクルが備えられており、自転車で妖怪ベンチを巡ることもできるようになった。こうした状況を地域住民はどのように評価しているのだろうか。次章で見ていくことにする。

3. アンケート結果の報告

(1) 回答者の属性

2022年3月6日（日）、4月3日（日）の両日、福崎町の河童を用いた地域振興に関するアンケート調

表1 性別

	人数(人)	割合(%)
男	34	39.1
女	52	59.8
その他	1	1.1
計	87	100.0

出典) アンケート結果

表2 年齢

	人数(人)	割合(%)
20歳未満	4	4.6
20歳～39歳	27	31.0
40歳～59歳	36	41.4
60歳以上	20	23.0
総計	87	100.0

出典) アンケート結果

表3 職業

	人数(人)	割合(%)
管理的職業	4	4.6
専門的・技術的職業	5	5.7
事務	7	8.0
販売	12	13.8
サービス業	25	28.7
保安	0	0.0
農林漁業	0	0.0
生産工程	5	5.7
輸送・機械運転	3	3.4
建設・採掘	0	0.0
運輸・清掃・包装等	2	2.3
その他	23	26.4
未回答	1	1.1
計	87	100.0

出典) アンケート結果

表4 居住地と居住年数

	人数(人)	割合(%)
5年未満	5	5.7
5年～10年未満	0	0.0
10年～20年未満	2	2.3
20年～30年未満	4	4.6
30年以上	12	13.8
福崎町居住計	23	26.4
福崎町以外に居住	63	72.4
無回答	1	1.1
総計	87	100.0

出典) アンケート結果

査を行った。3月6日は法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻、国際日本学インスティテュートの大学院生、文学部地理学科の学生計6人の協力を得て実施し、4月3日は筆者が単独で実施した。両日とも日曜日で福崎駅前広場ではマルシェが開催されていた。3月6日の調査は町内の商業施設を中心に行ったが、福崎駅前のマルシェ出店者・参加者にも一定数アンケート調査を依頼した。一方、4月3日は駅前広場で開催されていたマルシェ出店者・参加者へのアンケートが全てを占める(約40人)。両日ともマルシェ出店者・参加者の多くが町外住民で、その結果、全体のアンケート回答者の多くが福崎町外の住民という結果をもたらした。

アンケートは合計87人から回答を得た。男女比では女性が約60%(表1)、年齢層では20歳代から60歳代まで、比較的バランスの取れた回答数を得ることができたと考えている(表2)。職業構成では、マルシェ会場で多くの回答を得たため、販売業、サービス業の割合が40%を超えている(表3)。さらに今回のアンケートの特徴は、上述したように福崎町外住民の回答が72.4%を占めたことである(表4)。やはりマルシェ会場で多くの回答を得たことがこの結果をもたらしている。従って、本アンケート調査は福崎町民の意識以上に、福崎町に関わる町外住民の意識を明らかにするという結果をもたらした。逆に福崎町民は計23人と、全アンケート数の4分の1(26.4%)にとどまった。福崎町民では30年上の居住者が約半数を占め、町外では市川町、姫路市民の回答がそれぞれ11人と、一定の割合を占めた。

(2) 福崎町の河童に関わる取り組みへの参加状況

表5はアンケート調査で「河童に関わる取り組みに参加しているか」を聞いた結果である。「積極的に関わっている」、「少し関わっている」の回答者はそれぞれ2人、7人、計9人(10.3%)であり、「あまり関わっていない」、「全く関わっていない」の計が4分の3(74.7%)を占めた。ちなみに2017年11月に久留米市田主丸町で行った調査でもほぼ同じ内容の質問「あなたの事業所、またはあなたはこうしたイベント、お祭りに関わっていますか」をしており、その答えは「積極的に関わっている」18人(24.7%)、「普通に関わっている」9人(12.3%)と、回答者の3分の1程度が何らかの関わりを持っていた。

関わっている内容は、福崎町では「商品・サービスを提供している」7人(8.0%)、「関連イベントに参加している」(「積極的に参加している」、「時々参加している」、「ボランティアとして関わっている」の計)5人(5.6%)、「寄付金を提供」1人(1.1%)であった(表6)。田主丸町では、「商品・サービスを提供」5人(6.8%)、「イベントに参加」12人(16.4%)、「寄付金を提供」5人(6.8%)であった。河童に関わる取り組みへの参加において、福崎町よりも田主丸町の方が、参加率が少し高い結果となったが、田主丸町の場合、アンケートが土曜日の日中に行われ、しかもその時間帯に営業している小売店、飲食店を中心に訪問する形を採用していた。一方、福崎町では上述したように、マルシェに参加していた多くの福崎町外住民がアンケートに答えている。アンケート結果は、そうしたアンケート対象者の属性の違いが強く反映していると考えた方が無難であろう。

表5 河童に関わる取り組みに関わっていますか

		積極的に関わっている	少し関わっている	どちらでもない	あまり関わっていない	全く関わっていない	わからない	総計
総計(人)		2	7	6	10	55	7	87
割合(%)		2.3	8.0	6.9	11.5	63.2	8.0	100.0
性別 (人)	男	1	2	2	4	23	2	34
	女	1	5	4	6	32	4	52
	その他	0	0	0	0	0	1	1
年齢 (人)	20歳未満	0	0	0	1	2	1	4
	20歳～39歳	0	0	3	1	18	5	27
	40歳～59歳	0	6	3	5	21	1	36
	60歳以上	2	1	0	3	14	0	7
居住歴 (人)	5年未満	0	1	0	1	3	0	5
	5年～10年未満	0	0	0	0	0	0	0
	10年～20年未満	0	0	1	0	1	0	2
	20年～30年未満	0	2	0	0	2	0	4
	30年以上	1	0	3	3	5	0	12
居住地	福崎町(人)	1	3	4	4	11	0	23
	福崎町外(人)	1	4	2	6	43	7	63
	不明(人)	0	0	0	0	1	0	1
	福崎町(%)	4.3	13.0	17.4	17.4	47.8	0.0	100.0
	福崎町外(%)	1.6	6.3	3.2	9.5	68.3	11.1	100.0
	不明(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0

出典) アンケート結果

表6 関わりの内容

	人数(人)	割合(%)
寄付金を提供している	1	1.1
商品・サービスを提供している	7	8.0
取り組み団体のメンバーである	0	0.0
関連イベントにボランティアとして関わっている	1	1.1
関連イベントに積極的に参加している	3	3.4
関連イベントに時々参加している	1	1.1
その他	1	1.1
総計	14	16.1

出典) アンケート結果

注) 複数回答あり

(3) 福崎町の河童を使ったイベントの地域振興効果

次に河童を使ったイベントの地域振興効果に対する住民の評価を見ていく（表7）。全体では、河童に関する取り組みの地域振興効果が高いと考えている人が87人中68人（「とても高い」16人、「どちらかと言えば高い」52人）で、全体の4分の3を超える。「とても低い」と答えた人は0人で、「どちらかと言えば低い」と答えた人も1人であった。「わからない」も全体で9人とどまっている。前回調査を行った田主丸町では地域振興効果が高いと答えた人は3分の1を少し超える程度（38.3%）だった²⁾ことから、福崎町の河童による地域振興効果は町内外の住民に相当高く評価されていることがわかる。さらに今回の調査において、福崎町民のほとんど（23人中22人、95.7%）が河童による地域振興効果を認めている。福崎町民で「とても低い」、「どちらかと言えば低い」、「わからない」と答えた人は1人もおらず、「どちらでもない」と答えた人が1人のみであった。

表7 福崎町で行われている河童に関する取り組みの地域振興効果は高いと思いますか

(人)	とても高い	どちらかと言えば高い	どちらでもない	どちらかと言えば低い	とても低い	わからない	無回答	総計
総数	16	52	7	1	0	9	2	87
福崎町	6	16	1	0	0	0	0	23
福崎町以外	10	35	6	1	0	9	2	63
居住地無回答	0	1	0	0	0	0	0	1
(%)	とても高い	どちらかと言えば高い	どちらでもない	どちらかと言えば低い	とても低い	わからない	無回答	総計
総数割合	18.4	59.8	8.0	1.1	0.0	10.3	2.3	100.0
福崎町	26.1	69.6	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
福崎町以外	15.9	55.6	9.5	1.6	0.0	14.3	3.2	100.0
居住地無回答	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

出典）アンケート結果

(4) 河童を使ったイベントの地域振興効果の具体的内容

河童を使ったイベントの地域振興効果の具体的内容を見ていくために、地域振興効果を、「観光客が増えた」、「町の名前が有名になった」、「福崎町の人々が元気になった」、「経済的に潤った」、「町の人々の交流が増えた」の5項目に分けて質問した（表8）。回答は中間評価を「どちらとも言えない」とし、「はい」、「いいえ」を2段階（+2, +1と-2, -1）で回答を求める5段階評価とした。表8を見ると、全体としてプラスの影響が強く出ているのは「観光客が増えた」と「町の名前が有名になった」で、どちらも+2の強い「はい」が36人、全体の41.4%を占める。+1の「はい」もそれぞれ29人（33.3%）、32人（36.8%）おり、+2, +1の「はい」を合わせると、およそ4分の3の人が「観光客が増えた」、「町の名前が有名になった」を肯定している。特に福崎町民の肯定度が高く、+2, +1の「はい」を合わせると、「観光客が増えた」で86.9%、「町の名前が有名になった」は91.3%を占める。このあたりは実際に町ですれ違う観光客の増加や、テレビ等マスコミの注目度の上昇を実感しているのであろう。自由記

表8 河童に関する取り組みによる地域への影響

	はい		どちらとも 言えない		いいえ	無回答	総計
(人)	+2	+1	±0	-1	-2		
観光客が増えた	36	29	11	0	1	10	87
町の名前が有名になった	36	32	8	1	0	10	87
福崎町の人々が元気になった	10	28	36	1	1	11	87
経済的に潤った	12	21	42	0	1	11	87
町の人々の交流が増えた	15	28	33	1	1	9	87
(%)	はい		どちらとも 言えない		いいえ	無回答	総計
観光客が増えた	41.4	33.3	12.6	0.0	1.1	11.5	100.0
男	44.1	29.4	17.6	0.0	2.9	5.9	100.0
女	40.4	34.6	9.6	0.0	0.0	15.4	100.0
福崎町	56.5	30.4	4.3	0.0	4.3	4.3	100.0
福崎町以外	36.5	34.9	14.3	0.0	0.0	14.3	100.0
町の名前が有名になった	41.4	36.8	9.2	1.1	0.0	11.5	100.0
男	38.2	41.2	11.8	2.9	0.0	5.9	100.0
女	42.3	34.6	7.7	0.0	0.0	15.4	100.0
福崎町	47.8	43.5	4.3	0.0	0.0	4.3	100.0
福崎町以外	39.7	33.3	11.1	1.6	0.0	14.3	100.0
福崎町の人々が元気になった	11.5	32.2	41.4	1.1	1.1	12.6	100.0
男	5.9	29.4	52.9	0.0	2.9	8.8	100.0
女	15.4	34.6	32.7	1.9	0.0	15.4	100.0
福崎町	8.7	34.8	39.1	4.3	4.3	8.7	100.0
福崎町以外	12.7	31.7	41.3	0.0	0.0	14.3	100.0
経済的に潤った	13.8	24.1	48.3	0.0	1.1	12.6	100.0
男	8.8	20.6	64.7	0.0	0.0	5.9	100.0
女	17.3	26.9	36.5	0.0	1.9	17.3	100.0
福崎町	17.4	13.0	60.9	0.0	4.3	4.3	100.0
福崎町以外	12.7	28.6	42.9	0.0	0.0	15.9	100.0
町の人々の交流が増えた	17.2	32.2	37.9	1.1	1.1	10.3	100.0
男	11.8	38.2	38.2	2.9	0.0	8.8	100.0
女	21.2	28.8	36.5	0.0	1.9	11.5	100.0
福崎町	8.7	30.4	47.8	0.0	4.3	8.7	100.0
福崎町以外	20.6	33.3	33.3	1.6	0.0	11.1	100.0

出典) アンケート結果

述欄でも、「知名度が上がった」、「有名になった」、「福崎と言えば河童」、「河童に関する問い合わせが多数有」、「子供たちが河童を見に行きたいという」、「河童（福崎町）の話題を聞く事が多い」、「福崎の河童の話はよく聞く」等の書き込みが多く見られた。

一方、「福崎町の人々が元気になった」、「経済的に潤った」、「町の人々の交流が増えた」項目で、「+2 はい」と答えた人はそれぞれ10人（11.5%）、12人（13.8%）、15人（17.2%）、「+1 はい」と答えた人は28人（32.2%）、21人（24.1%）、28人（32.2%）だった。いずれの項目も、両者を足しても50%には届かない。ただ、-2、-1の「いいえ」を選んだ人はいずれの項目でも1～2人にとどまり、その分、「ど

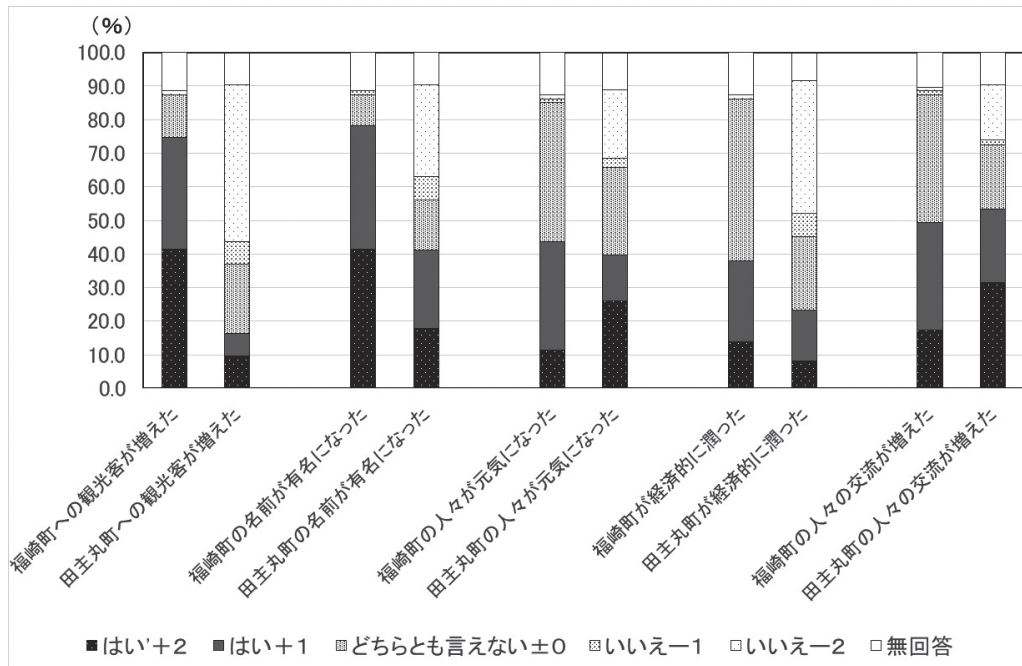


図 21 福崎町と田主丸町の河童に関する取り組みによる地域への影響

出典) アンケート結果

ちらとも言えない」を選んだ人の割合が高くなっている。これを属性別に見ていくと、「福崎町の人々が元気になった」、「経済的に潤った」項目では、男性よりも女性の肯定度がかなり高く、「町の人々の交流が増えた」項目でも+2の「はい」の割合が男性を大きく上回る。また、「経済的に潤った」、「町の人々の交流が増えた」項目では、福崎町民よりも町外住民の肯定度が高い。

このように見えてくると、福崎町における河童による地域振興策は町内外の住民の間でかなり強く肯定されていることがわかる。今少し推測を重ねれば、「町の名前が有名になった」(アンケート結果では強い肯定) ことにより、「観光客が増えた」(強い肯定) もの、「経済的に潤った」(弱い肯定) と言い切るほどではない。アンケートの自由記述を見ると、観光客が増え、直接的な経済効果を感じる者も現れつつあるが、町全体に経済活性化をもたらしているとは言い切れないようである。自由記述欄には、「振興効果はだいぶ高い」、「たくさんのお店が喜んでいる」、「妖怪ベンチ巡りでお店に来てくれる人が増えた」など、直接の経済効果を示すコメントが寄せられたものの、その数は必ずしも多くない。

一方、「福崎町の人々が元気になった」、「町の人々の交流が増えた」項目の結果を見ると、河童による地域振興策によって、人々が元気になったり、交流が増えるといった間接的な経済効果については、一定程度の肯定はあるものの、今のところ、そのレベルに留まっている(弱い肯定)。

次に、これらの結果を田主丸町の結果と比較したのが図 21 である。全体の傾向として言えるのは、河童を使ったイベントの地域振興効果は、福崎町の方が田主丸町よりも高いということである。特に観光

客の増加や町の名前が有名になることについては、かなりの差をつけている。一方、町の人が元気になったり、交流が増えたという点については、両地域の差はほとんどなく、逆に強い肯定度（+2）において田主丸町の方が高くなっている。ただ、上述したように、アンケート対象者の属性が大きく異なるため、単純な比較は危険であり、これ以上の言及は控えたい。

(5) 福崎町の河童による地域振興の特徴

今回のアンケート調査では、次のように福崎町の河童を使ったイベントの地域振興効果の特徴を尋ねている。「全国各地の河童による地域振興に比べて、福崎町の河童による地域振興の特徴は何でしょうか」。この質問の回答は自由記述になっているので、それを整理して紹介する。回答者の属性に伴う特徴としては、福崎町民の河童による地域振興効果に対する評価が高く、かつその説明内容が詳しい。さらに男性よりも女性の方がより具体的に記述している。

全体の回答には大きく次の3つの特徴があった。1つ目は「怖い河童」、2つ目は「河童以外の妖怪に手を出している」こと、そして3つ目は「町中妖怪だらけ」である。1つ目の「怖い河童」については、約20人がそのようにコメントしている。「河童の怖さ」、「ゆるキャラでない」、「ゆるキャラを逆手にとった怖い河童」、「リアリティーがあっっておもしろい」、「リアルだし、インパクトがあると思います（特に池から顔出す河童）」。

続いて「河童以外の妖怪に手を出している」と答えたコメントは8人であった。「河童以外の妖怪が居る所」、「河童だけではなく、他の妖怪の町（街）にしている」、「河童から、その他の妖怪に広がっており、新しいキャラクターや取り組みが生まれる」、「河童以外にもがんばっている」、「福崎町の場合は河童だけでなく妖怪に重点を置き、楽しく、おかしく盛り上げていく特徴があると思います」などである。

最後に「町中妖怪だらけ」もおおよそ10人からコメントが出された。「福崎町の所々に河童だけではなく、妖怪の像があり、それを廻るのも楽しいと思う」、「町中の色々な所に妖怪のフィギュアがあり、公園の池から出てくる河童がすごく人気」。

この3点以外にも、「名前がついていて親しみやすい」、「物語性がある（ガジロウとガタロウが兄弟）」などとコメントする者や、柳田國男との関係を指摘する声も複数あった。

全国各地で展開する河童を用いた地域振興や地域おこしで、福崎町が参考にすべき地域の事例はあるかという問いに対しては、3人が「ある」と答え、そのうち2人が具体的な名前として遠野を挙げている。ただ、「わからない」（74人、85.1%）と答える人が圧倒的に多かった。ちなみに、福崎町と遠野市は、柳田國男ゆかりの地という結びつきから、2014年8月23日に友好都市共同宣言に調印している。

4. 福崎町の河童戦略の今後

(1) 河童は福崎町にとってどのような存在か

ここでは河童が福崎町においてどのような存在なのか、そして、河童に関する取り組みの今後の課題

を尋ねた結果を見ていく。河童が福崎町においてどのような存在なのかについてのアンケート結果は、回答のほとんどが、河童は観光資源であり、町のシンボルとするものであった。両者は町の内外という視点の違いはあるものの、ほぼ同じ意味内容を示していると考えられる。この質問に対する「わからない」、「ない」といった否定的な答えはわずかであった。

福崎町にとって、河童は観光資源であるとする答えはおよそ 30 あり、回答の中で最も多かった。その具体的内容は、「資源の 1 つ」、「観光目的の 1 つ」、「観光資源になっている」、「観光資源と地域振興」、「客寄せ」、「広告塔」、「福崎町の名前が広まった原点」、「福崎を知ってもらえる良いキャラクター」、「福崎町の知名度を上げた功労者」、「街の活性化に役にたっている」、「町おこし」などである。後半の「福崎町の知名度を上げた功労者」、「街の活性化に役にたっている」、「町おこし」などは次に述べる町のシンボルとしての評価と同じ意味内容かもしれない。

次に町のシンボルとして答えたのは 20 ほどあり、「神」、「福の神」、「福崎＝河童」、「福崎町の誇り」、「最後のとりで」、「なくてはならないもの」、「名物的存在」、「福崎町のシンボル」、「福崎町のイメージキャラクター」、「マスコットの存在」、「福崎町が目玉の一つ」などである。いずれも最大級の賛辞で河童を讃えている。

上の 2 つに数では圧倒的に劣るが、河童の由来に基づいた位置づけで語る人もいた。「先人から語り継がれている愛着のある存在」、「子供が川遊びで危険な目に合わないようになっている存在」、「水源を大切にすることになる存在」などで、「私は柳田國男の方が好きです」という答えもこの範疇に含めていいのかもしれない。福崎町の河童はその見た目の怖さが強調され、元々水生生物であったことが薄れているが、今後、河童による地域振興策が長期戦となっていくと、改めて柳田國男との結びつき、河童の生態などが注目されていくと思われる。これについては最後に改めて触れてみたい。

河童が福崎町においてどのような存在なのかを語る最後のタイプとしては、子供と親の交流手段といった、福崎町民をつなぐ役割を述べる人も少数ではあるが存在した。「1 つのキャラとして子供、その親との交流がふえている気がする」、「子供から大人までみんなが楽しめる場所になっている」。多くの回答があった町のシンボルといった抽象的な位置づけではなく、家族の結びつきへの貢献を説明する点において、その意義を確認する必要があるのではないか。

(2) 河童に関する取り組みの今後の課題

最後に河童による地域振興の今後の課題を問うた質問の回答を見ていく。大体の方向性は、継続を考えた上で次の試みが重要である、という内容であった。「次の仕掛け」、「継続すること」、「2 回目に来るための工夫が必要」、「ある程度リアル妖怪ができたので、今後は飽きられないようにする必要がある」、「ブームの過ぎた後が大事。次何をするか。何につなげるか」などである。

そのための手段として提案されたのが、「さらなるアピール」、「イベントの実施」、「ゆるキャラ化」、「妖怪館の建設」、「グッズ・お土産の増加」等である。

まずは河童並びに妖怪のアピールを主張するものから見ていく。これには河童のアピールを主張する

ものと、より広く妖怪全体のアピールを主張するものに大きく分かれた。河童のアピールでは、「もっと河童をアピールする」、「妖怪が増え、河童のイメージが少し薄れている気がする。妖怪以上に河童の地域振興をしないといけない」、「ガジロウさん人気を保つこと」、「もっと、いろんなテレビに取材依頼をして河童を有名にする」、「河童を身近な存在として感じられるような取り組みを継続してほしい」、「雌の河童とか子供の河童も面白いと思います」などがあった。

また、河童に限らず妖怪全体のアピールを主張する声としては、「もっと妖怪の数を増やす」、「もっと写真スポットを増やす」、「SNSなどでの紹介」、「もっとイベントを増やし、行っていることを宣伝する」など、どちらかと言うと、次に述べるアピールの手段とつなげての回答が多い。同じアピールでも、「全国展開」や「県民にはわかるようにしたほうがいい」といった空間的な広がりを主張する答えもあった。

次に、アピールの手段について提案されたものを見ていく。まずはイベントの実施である。「一度のブームにならない様に河童や妖怪のイベント等をする」、「イベント等がないので河童を使ったイベントをもっと積極的に行った方がいいと思います」、「現在はベンチを設置するに事業がとどまっている感じがあるので、スタンプラリーなどの展開が必要」、「行事等に河童や他の妖怪を連れてきてほしい」などである。

イベントの実施と同様に多かったのがゆるキャラ化である。「ゆるキャラ化はいかが」、「ゆるキャラをつくってもっとイベントを興す」、「子供たちと触れ合うことのできる河童（可愛い感じのもの）を作る」、「可愛い河童はどうでしょうか」、「怖いイメージもある河童ですが、やさしい河童、地域を守る神様のような部分をアピールしていくと、パワースポットとして話題性もあるかなと思います」。既にガジロウの被り物があるので、ここでのゆるキャラは、ガジロウ等の怖い河童ではなく、どちらかと言えば、フクちゃんサキちゃんタイプのゆるいキャラクターへの要望だと思われる。もしそうであるならば、フクちゃんサキちゃんを再活発化すればいいことになるが、回答者はフクちゃんサキちゃんでは魅力に欠けると考えているのか、その存在を知らないのか。どちらを前提にしているかで、対応の仕方も変わってこよう。

また、数は決して多くないが、アピール手段として、「妖怪館」の建設や「妖怪人形のお土産」、「河童関連グッズを増やす」といった答えがあった。これも河童や鬼、天狗については既にプロモデルが発売されている。そうではなくてフィギュアのようなものを考えているのであろうか。

同じアピールでありながら、注目したいのが、「河童や妖怪のモニュメントが前面に出ているけれど、なぜ、福崎町＝河童なのか」というのを知らない人も多いと思います。柳田國男先生の民俗学をもっとアピールしていくことも必要かなと思います」、「なぜ河童なのかを知っていくこと、福崎町にとっての「河童」の理由」などである。

上述の今後の課題とは趣が異なるが、技術的な課題も提出されているので、紹介しておく。「レンタサイクルが子どもも乗れますように」、「老きゅう化への対応」などである。特にレンタサイクルについては、2022年4月時点で、福崎駅前と辻川山の2つの観光交流センターのサイクル基地が連動しておらず、駅前で借りたレンタサイクルは駅前で返さなければならないルールであった。車で訪れた人には合理的かもしれないが、列車等公共交通で来た人にとっては、とても不便である。子供の乗りやすいレンタサイクルをという要望とともに、解決の迫られる問題である。

5. 終わりに

本稿では兵庫県福崎町で展開する河童を用いた地域振興策について、アンケートの調査結果を中心に検討を行ってきた。アンケート内容は簡潔で、回答者数も多くないものの、河童による地域振興策への地域住民の意識については、部分的ながら解明できたと考えている。

今回のアンケート調査において、最も注目すべきは、アンケート回答者の多くが福崎町の河童による地域振興策を大変好意的に評価していることである。特に福崎町民の支持は高く、筆者の予想を大幅に超えるものであった。このことについては様々な解釈が可能であるが、恐らく、観光面ではこれまで必ずしも注目を浴びることのなかった福崎町が、ガタロウ・ガジロウという怖い河童の出現により、思わぬ反響を獲得し、多くの人々から熱い視線を浴びるようになったことが、その大きな要因として考えられよう。その後の妖怪ベンチの設置をはじめとする各種対策の実施が、それを物語っている。河童が池から出現してまだ10年もたっておらず、また、ここ数年はコロナの影響もあり、観光客数の動向など、判断しづらい状況にあることも事実である。しかし、現在の動向を見る限り、今後も福崎町の観光対策の中心に河童と妖怪が存在し続けることは間違いないであろう。最後にそれとの関係で、コメントを述



図 22 河童と柳田國男

出典) 筆者撮影 2018年3月11日

べておきたい。

福崎町はこれまで柳田國男の出生地と地域の名産であるもちむぎ麵を中心に観光対策を行ってきた。そこにガタロウ・ガジロウという怖い河童が出現したことにより、その内容が大きく変わろうとしている。幸い、ガタロウ・ガジロウは町内外の人々から大変好意的に迎えられた。ただ、このような状況に対して、一抹の不安があるのは、やはり、町中が妖怪だらけになることである。映画のセットのように、町の至る所に妖怪が現れるということは、福崎町の人々から見て、観光客の増加や経済的成功がわかりやすく続いている間は、問題として認識されないかもしれない。しかし、観光面での停滞が見えたり、町中がさらに妖怪だらけになっていくと、それを不安がったり、心配する人が現れることはないであろうか。その場合、河童並びに妖怪への評価は一転して批判に代わる可能性もある。その点で、河童や妖怪を中心に据えた観光対策は、今後の展開の中で、なんらかの基準やルールを伴うものであると筆者は考える。

ここで筆者が考える基準とは、妖怪ベンチの数の問題ではなく、河童、妖怪による観光対策を貫くストーリーの問題である。少なくともブームの火付け役となった河童は、数ある妖怪の中でも特別の存在であり、またその河童も柳田國男との関係で語られる存在である。少なくとも河童に関しては福崎町に確たる伝説があり、他の妖怪とは異なり、福崎町に内在する特徴とすることができる。上述した「河童や妖怪のモニュメントが前面に出ているけれど、なぜ、福崎町＝河童なのか」というのを知らない人も多いと思います。柳田國男先生の民俗学をもっとアピールしていくことも必要かなと思います」や「なぜ河童なのかを知っていくこと、福崎町にとっての「河童」の理由」というコメントは、実は福崎町外住民からのコメントであり、福崎町として、今後こうしたコメントに真摯に答えていく必要があるのではないだろうか。

河童が水辺から離れ、陸に上がり続けると、頭の皿は乾き、身動きできなくなってしまう。その点で、ガタロウ・ガジロウは水から離してはいけないのであり、かつ柳田國男から離れてはならないのである。福崎町の河童は現在、水辺空間から離れ、乾いた大地をさまよい始めているようにも見え、ここで改めて河童と水辺空間の関係を思い出し、つなげていく必要があると考える。「先人から語り継がれている愛着のある存在」、「子供が川遊びで危険な目に合わないようになっている存在」、「水源を大切に理由になる存在」など、アンケートの回答の中に既に答えは出ている。それを、柳田國男を媒介にして現在の対策とつなげていくことが大切である。福崎町もその点の理解は強くあるようで、図22のような設定が福崎町にとって最も望ましい構図（少しガタロウ・ガジロウが大きすぎたり、河童の数が多すぎる気もするが）であると筆者は考える。

注

- 1) 現在は神戸医療未来大学キャンパス内に設置されている。
- 2) 田主丸町の回答選択肢は「高い」、「どちらかと言えば高い」、「どちらとも言えない」、「どちらかと言えば低い」、「低い」、「わからない」、「その他」と、福崎町の選択肢と微妙に異なる。福崎町の回答選択肢には「その他」がない。

参考文献

- 浅野敏久・金 科哲・伊藤達也・平井幸弘・香川雄一・フンク カロリン (2015)「ラムサール条約湿地に対するイメージの日韓差：韓国の厳しい湿地保護制度が受容される背景」地理科学 70-2
- 浅野敏久・金 科哲・平井幸弘・香川雄一・伊藤達也 (2013)「ラムサール条約湿地・ウボ沼（大韓民国）の環境保全と住民」E-journal GEO8-2
- 浅野敏久・李 光美・平井幸弘・金 科哲・伊藤達也 (2011)「中国・太湖の富栄養化問題と 2007 年のアオコ大発生事件（利水障害）後の対応」E-journal GEO5-2
- 伊藤達也 (2005)『水資源開発の論理—その批判的検討—』成文堂
- 伊藤達也 (2006)『木曽川水系の水資源問題—流域の統合管理を目指して—』成文堂
- 伊藤達也 (2008)『水資源計画の欺瞞—木曽川水系連絡導水路計画—』ユニテ
- 伊藤達也 (2017)「韓国の水辺環境改変事業の特徴—韓国 4 大河川再生事業を事例に—」地理科学 72-3
- 伊藤達也 (2018)「利根川の利水問題」経済地理学年報 64-2
- 伊藤達也 (2019a)「長良川河口堰最適運用方法の模索」法政大学文学部紀要 78
- 伊藤達也 (2019b)「石木ダム計画の検証—とくに慣行水利権，不安定水源問題に関して—」石木ダム事業認定取消等訴訟意見書
- 伊藤達也 (2019c)「河童による水辺環境保全運動と地域振興効果—福岡県久留米市田主丸町を事例に—」水資源・環境研究 32-1
- 伊藤達也 (2020)「環境保全と地域振興は両立できるか」(伊藤達也・小田宏信・加藤幸治編『経済地理学への招待』ミネルヴァ書房)
- 伊藤達也 (2021a)「熊本県五木村における村民意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 82
- 伊藤達也 (2021b)「ダムと環境問題について考える—川辺川ダム問題を事例に—」都市問題 112-8
- 伊藤達也 (2021c)「熊本県五木村における観光客の意識調査の分析結果と地域再生」法政大学文学部紀要 83
- 大塚 攻・向井 宏・清野聡子・林 修・高橋俊吾・清水則雄・足立賢太・近藤祐介編 (2020)『永遠に残したい曾根干潟—世界的に貴重な野鳥と生きた化石カブトガニの楽園—』NextPublishing Authors Press
- 大野 芳 (2000)『河童よ，きみは誰なのだ—かっぱ村村長のフィールドノート—』中公新書
- 国土交通省近畿運輸局神戸運輸監理部兵庫陸運部 (2018)『兵庫県福崎町「地域連携サポートプラン」提案書』(<https://www.twb.mlit.go.jp/kinki/content/300226.pdf>)
- 白石太良 (2020)「地域社会づくりとしてのミニ独立国—“ツチノコ共和国”と“河童共和国”を例に—」流通科学大学論集—人間・社会・自然編—32-2
- 須藤和夫 (1985)『三面川サケ物語』朔風社
- 田辺陽一 (2006)『アユ百万匹がかえってきた—いま多摩川でおきている奇跡—』小学館
- 特定非営利活動法人風土工学デザイン研究所 (2012 年度)『河川整備基金助成事業 河童伝説をテーマとした地域おこしに関する風土工学的研究』
- 福崎町 (2014)「広報ふくさき」3 月号
(<http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/cmsfiles/contents/0000001/1136/201403.pdf>)
- 福崎町 (2018)「広報ふくさき」9 月号
(<http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/cmsfiles/contents/0000002/2495/201809.pdf>)
- 福崎町 (2019)「広報ふくさき」10 月号
(<http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/cmsfiles/contents/0000002/2838/201910.pdf>)
- 福崎町 (2021)『福崎町第 5 次総合計画（サルビアプラン）資料編』
(<http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/cmsfiles/contents/0000000/19/R3001.pdf>)
- 福崎町 (2022a)「広報ふくさき」9 月号
(<http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/cmsfiles/contents/0000004/4227/202209.pdf>)
- 福崎町 (2022b)「広報ふくさき」10 月号
(<http://www.town.fukusaki.hyogo.jp/cmsfiles/contents/0000004/4264/202210.pdf>)
- 福崎町観光協会 (2021)「妖怪ベンチ探検マップ」(2022 年 11 月 8 日検索)
(<http://www.fukusakikankou.jp/document/benchimap.pdf>)

- 福崎町観光協会 (2022a) 「福崎町イラストマップ」 (2022 年 11 月 8 日検索)
(<http://www.fukusakikankou.jp/document/kankoumap.pdf>)
- 福崎町観光協会 (2022b) 「キャラクターグッズ」 (2022 年 11 月 8 日検索)
(<http://www.fukusakikankou.jp/goods.html>)
- 福崎町観光協会 (2022c) 「福崎町観光ガイド」 (2022 年 11 月 8 日検索)
(<https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=http%3A%2F%2Fwww.fukusakikankou.jp%2Fdocument%2Ffukusakiguide.docx&wdOrigin=BROWSELINK>)
- 福崎町観光協会 (2022d) 「ガジロウのひみつ」 (2022 年 11 月 8 日検索)
(<http://www.fukusakikankou.jp/img/center/gajirounohimitsu.jpg>)
- 水と文化研究会編 (2000) 『みんなでホタルダスー琵琶湖地域のホタルと身近な水環境調査一』 新曜社
- 柳田國男 (1977) 『妖怪談義』 講談社学術文庫
- 遊磨正秀・生田和正 (2000) 『ホタルとサケーとりもどす自然のシンボル一』 岩波書店
- 横川 健 (2005) 『三面川の鮭』 朝日新聞社
- 吉崎昌一 (1982) 『サケよ、豊平川をのぼれ一さっぽろサケの会の記録一』 草思社
- Millennium Ecosystem Assessment 編／横浜国立大学 21 世紀 COE 翻訳委員会責任翻訳 (2007) 『国連ミレニアムエコシステム評価 生態系サービスと人類の将来』 オーム社

Regional development measure using Kappa (water sprite) —Case Study of Fukusaki Town, Hyogo Prefecture—

ITO, Tatsuya

Abstract

This paper reports the results of a questionnaire survey conducted in Fukusaki Town, Hyogo Prefecture to clarify the regional development using Kappa (water sprite). In Fukusaki Town, a regional development measure using scary Kappa has been adopted since 2014. The effect of this promotion has been great, and it has gained great support from residents inside and outside Fukusaki Town.

When asked about the regional development effects by Kappa in five items: “increased tourists,” “the town became famous,” “the people of Fukusaki became energized,” “the economy became rich,” and “the interaction between the town’s people increased,” “increased tourists” and “the town became famous” received high evaluations.

The regional promotion effect of events using Kappa was summarized in three ways: “scary Kappa”, “dabbling in ghost other than Kappa”, and “full of ghost in the town”. For Fukusaki Town, Kappa is a tourism resource and a symbol of the town. In the future, it is important to consider the continuation of the next attempt.

When Kappa leaves the water’s edge and goes up to land, the plate on his head dries up and he can’t move. In that regard, I think we should not let Kappa go away from the water and we should not go away from Kunio Yanagita.